

(論 文)

## 新任教員の困難に関する考察

—質的・量的調査分析から—

石 原 陽 子

プール学院大学研究紀要 抜刷

第50号 (2010年12月)

## 新任教員の困難に関する考察

### 一質的・量的調査分析から一

石原陽子

#### 1. 新任教員の困難に関する考察の意義と問題の所在

近年、団塊の世代の退職を機に教育の場でも世代間交代の加速度が増してきている。初任者の成長の問題は学校教育にとって緊急且つ重要な課題となっている。それだけでなく、教職に対する社会の目の厳しさを背景に免許更新制や教職大学院の設置、教員の評価制度の問題など教員の資質に対する政策が文部科学省や都道府県教育委員会で施行されており、それは、大学までも巻き込んだものとなっている。

実際に、この5月ごろ筆者が訪問した学校の校長先生は「5年生を担当した新任教員が大変なんですわ。毎日誰かが教室に入らなければ授業が成立しないんですわ。困ったもんです」と語っていた。また、教育委員会の指導主事は「もう、今年になって3人も学級が崩壊していてもちそうもない新任の先生がいるんです。学校も困っています」と語っていた。このような中で、新任教員の成長を考えるに当たって、彼らが実際に何に困難性を感じているのかを分析することは、施策や対応を考える上で有効であると考えられる。

#### 2. 先行研究の概観と課題

教師の成長に関する研究として代表的な者は、山崎（2002）のライフコース研究であろう。山崎は世代別のアンケート用紙で、教師の力量形成の契機と時期を調査している。その結果によると、自分の成長に影響を与えたのは、第1位が「学校内での優れた先輩や指導者との出会い」、第2位が「学校内での研究活動」となっている。佐藤（1997）もまた、多くの教師たちの声として、学校全体の専門的文化の成熟度が、教師の成長にとって決定的な意味をもつことを指摘している。酒井・島原は（1995）は、アメリカでの半年間に及ぶ新任教師への参与観察によって、同僚の存在の重要性に言及している。そこでは、新任教師の成長にとって、同僚とのインフォーマルな対話が重要なものであったと語られている。

これらは、レイヴとウェンガー（1983）や上野（1999）、佐伯（1995）らの研究による状況に参加することによって職業人としての資質を身につけるといふ正統的周辺参加論に通じるものであり、職業人としての学習は状況に埋め込まれていると言えるのではないかと考えられる。

また、教員の専門家としての成長という側面で省察の重要性への言及（佐藤、秋田、浜田 等）がある。教師は状況の中で自己の実践を省察することによって専門性を向上させていくというものである。このように、先行研究を概観すると、職場を離れて行われる初任者研修は否定的に語られることが多い。筆者自身も、教員は職場の中で実践をしながら省察をし、成長していくと考えている。

これらの先行研究から明らかになっているのは、新任教員は配属された勤務地での経験を通して、他の教員との関わりの中で、資源を取得したり、省察をしたりしながら成長するということである。実際、筆者が新期採用時からフィールド調査した新任教員の場合も、勤務地で同僚教員から多くの助言や示唆を得ながら、自分の実践を振り返り自分を成長させていた（石原 2008）。しかし、幾人かの新任教員に関わる中で彼らの困難が一応でないこと、彼らの属性や勤務地の状況に左右されることも確認した。しかし、新任教員が困難を有し苦勞しながら実践していることは自明とされながらも、新任教員の困難の内容についての研究は見受けられない。そこで、本研究では、質的・量的調査により、新任教員の困難とは何かを分析する。このことは新任教員の質保障のための施策や対応の在り方を考える上で意味あるものと考えられる。

本稿では、次節において本研究の方法を述べる。続く4節においてフィールド調査で見出された新任教員の不安や困難について整理する。5節では新任教員へのアンケート調査に基づいた分析を行い、新任教員の抱える困難とは何かを明らかにする。6節で、量的・質的調査を踏まえた新任教員の困難について考察をする。

### 3. 研究の方法

新任教員の困難の分析をするために、Z市に新規採用された新任教員に対する質的・量的データ収集を行った。Z市は人口が50万人以上の近畿圏の都市である。200人以上の新任教員がここ数年毎年のように採用されている。団塊の世代の大量退職によって、新規採用の教員が増え、世代間交代が進んでいる街である。Z市の事例は、今後10年くらいで教員の3分の1が交代してしまう日本の教員年齢構成の様相を先取りしていると判断できると考えた。筆者は2006年より新規採用された教員の成長を観察し、その特質を見出したいと考え、採用され着任した4月から1年間を通じ1週間に1回程度の割合で学校訪問をし、参与観察を続けた。その時のデータを本研究の初任者の困難の分析を行うにあたっての質的データとした。訪問した学校は、表1に示した通りである。

表1 フィールド先の一覧

2005年度	M小学校（静かな住宅地）	A先生（2年生担任 女性）
2006年度	P小学校（駅前の賑やかな住宅地）	B先生（3年生担任 女性）
2007年度		C先生（4年生担任 女性）
		D先生（3年生担任 男性） E先生（2年生担任 女性）
2008年度	K小学校（府営団地を含む住宅地）	F先生（2年生担任 男性）

三つの学校の簡単な紹介をしておく。M小学校は、50年ほど前に造成された落ち着いた住宅地にある。2004年に文部科学省指定の国語教育の研究発表を行っており、2005年も引き続き国語教育を中心として校内の研究を行っている。授業研究も全教員での公開が年間6回（各学年1回）実施されているだけでなく、全教員が何らかの形で自主的に授業公開をすることになっているという研究に前向きな学校である。

P小学校は、朝夕ともなると大都市に勤務する乗客で賑わう駅のある住宅地に設置されている。駅周辺にはパチンコ店などが並び、夜ともなるとネオンが華やかになる街である。学校の子どもの転出入も多く、2006年には6年生全体が落ち着きのない様相を示し、生徒指導上の問題も多発していた。

K小学校は社会経済的背景の厳しい子どもたちが通学する学校である。校区には、家庭的要因で保護者から離れて暮らざるを得ない施設の子どもたちもいる。その中であって、校長は子どもの学力の向上を図りたいと文部科学省の国語力向上モデル事業の指定を引き受け、教師の指導力向上に積極的に取り組もうとしている。先生たちも校長の意を受け、子どもたちの学力向上のために校内研修に取り組んでいる。

以上3つの学校に、2005年から2008年まで参与観察を実施した。筆者は、毎年新任教師と出会う中で、彼らの一番困難な問題は、自分の指導力や保護者対応などへの不安であると感じるようになった。新任教師が増加していく中で、保護者の新任教師たちへまなごしの厳しさは増加している。その中であって、新任教師は、時には身体的不調を感じながら日々を乗り切ろうとしていた。そこで、「自分は教師としてそれなりに仕事をやれている」と感じるができずに困惑していた。

二つ目の調査は、2010年度7月・8月に実施した新任教員対象のアンケートである。2010年度に200名以上の小学校・中学校に新規採用されたZ市の新任教員全体を対象としたアンケートである。初任者研修の場で「次年度以降の研修の改善に役立てる」とのアナウンスのもとで教育センター指導主事によって実施された。内容は現在自分が感じている不安や困難についての選択や、その解決のための方策についてのものである。本研究は困難の内容分析を目的としているので、解決のため

の方策については他の稿にゆずる。新任教員たちは、どのような困難を感じているのであろうか、次節では、フィールドワークで観察したりインタビューをしたりした内容を元に整理をする。

#### 4. 不安や困難さを抱く新任教師たち

筆者の出会った6人の新任教師たちは、強い不安や困難さを訴えた。新任教師たちの不安や困難は3つに分けられる。第1は日々の授業に関する不安や困難さである。それだけではなく、教師の授業に関する指導力を高めることを意図している授業研究会においても別な形の不安や困難さを感じていた。第2は日々の子どもの指導に関する不安や困難さである。第3は学習・生徒指導双方に関連するが、保護者対応に関する不安や困難さである。始めに、最も大きかった自分の授業に関する不安や困難さを記述する。

##### ① 授業に関する不安

まず始めに、P小学校のB先生の語りをみてみたい。

新任のB先生は他府県の大学を卒業し、知人のいないP小学校で新任教師として勤務することになった。3年生は3学級あり、B先生は2組の担任である。他の2学級はベテランの女性教師である。B先生は、授業が思い通りに進行しないことに対する不安が最も強かった先生である。B先生の9月と12月のインタビューでの語りから、B先生の授業に関する不安がどのようなものであったのかをみる。まず、9月である。

1学期は睡眠不足でした。授業がうまく行かず、家に帰ると泣き出したり、何度も吐いてしまったりすることもありました。朝も早くから目が覚めてなかなか眠られなかったです。体面でもだるかった<sup>1</sup>。3学級あって、自分のクラスだけ駄目だったらいけない、ちゃんとしな  
いといけないって思っていました。<sup>2</sup>

(P小学校 B先生インタビュー 2006/9)

B先生は授業計画を綿密に立て、計画どおりに実践しなければならないという思いを強く持っており、それができないで、下線1にあるように身体的な症状を示していた。新任教師である自分の学級が他の2学級と比べて崩れたりしてはいけないと思いプレッシャーを感じていた(下線2)。12月になっても、B先生の不安は継続していた。

となりの先生の授業を後ろから見せていただいたんです。そしたら、子どもが言いたいことを言いながら、生き生きと勉強してるんです。私のクラスの子はなんてつまらなさそうな顔を

してるんだらう<sup>3</sup>。私のクラスの子も、あんな授業が受けられたのに。その権利があったのに、私のクラスになって、可哀想やなって<sup>4</sup>思ったんです。

(P小学校 B先生 インタビュー 2006/12)

B先生は、自分の授業に対する不安がある中で、同学年のベテラン教師の授業を参観した後で、自分の学級の子どもたちの授業中の表情と比較し、教師としての自分の授業を否定的に捉えている(下線4)。B先生はベテランの先生の指導に接し、自らの未熟さを認識し、強い不安と焦燥を感じているのである。また、同僚の先生も「7月頃には、B先生の顔がうつろで、心配しましたね」と語っていた。

次年度も同じP小学校でフィールドワークを実施した。そこでも、4年生担任のC先生は授業に対して不安を抱えていた。

とにかく、授業が、自分の計画してた通りに動かない、で、やっぱり計画があるからには、こうしてこうきて、こういう感じの言葉が出るから、こうしてって思ってたんと全然子どもから出てくる発言が違ったり、もっといいのが出てきたりっていうことがあって、本当はもっとフレキシブルに対応していくべきなのに、どうしても、自分の作ったシナリオ通りになっていかない不安<sup>5</sup>になって、時間取られていいのかなって、もっと本当は子どもの発想を生かせるような授業を作れたらいいのですけど、そこがまだまだ、自分のシナリオ通りじゃないと、不安ていうか<sup>6</sup>。

(P小学校 C先生のインタビュー 2007/7)

C先生は、自分が作成した学習計画通りに行くことを課題にしているのであるが、子どもは自分の意図通りの反応を示さない。しかし、柔軟に対応することもできないと不安を感じている(下線5.6)。また、「月曜日になるのが憂鬱で、また月曜日かって思っていました」と12月頃のインタビューでも語っている。

B先生とC先生たちに共通することは、綿密に授業計画を立てるが、実際の授業中の子どもの反応が自分の計画通りにならないことに強い不安と困難を感じていることである。また、自分の授業指導力に不安をかかえながらも解消する道がみえていない。

しかし、それだけでなく、教師の授業力向上のために実施される校内授業研究会も彼らの不安材料になっていることが、彼らの語りから読み取れた。先のF小学校のB先生が隣の学級のベテランの先生の授業を観た後の不安と同様なことを校内の授業研究のための全体研修会でも感じていたM小学校A先生についてみていきたい。A先生は1年間の講師経験の後教員として採用され、M小学校の2年生担任になった。校内授業研究会参加後のインタビューでA先生は次のように語った。

(この学校は) 研究授業が多いなと思いました。授業後の研究会では、何を言っているか分からなかった。何を話していいか分からなかった。<sup>7</sup> 突拍子もないことを言って、取り残されたような気分<sup>8</sup>になりました。今まで何もしていなかったなど不安<sup>9</sup>になって、学年の先生に聞くと徐々に分かるよって言われました。でも、何を観たらいいの、何を話したらいいのか分からなくて、これが何回もあると思うと勉強せな<sup>10</sup>と思いました。

(M小学校 A先生へのインタビュー 2006/6)

A先生は、下線7.8にあるように、同僚教師の話し合い内容が理解できず参加できないこと、これまでの自分が教師としての力量をつけてきていないことを反省するとともに、そのような自分に不安を感じているのである(下線9)。A先生は授業後の研究会に参加して、改めて教師としての自分を問い直している。K小学校のF先生も同じような内容を語った。

何がいいの、わからなかったんですよ。<sup>11</sup> 教師の発問について聞かれて、どんな発問が目標の達成にとっていいの、僕はわかりませんね。子どもはちゃんと全員ノートを取っているか、ごちゃごちゃせんと授業に集中してるか、子どもが聞いているかとかは見てわかるんですけど、発問がどっちがいいとかはわかりませんね。<sup>12</sup>

(K小学校 F先生へのインタビュー 2008/6)

F先生は、校内の授業研究会の時に司会進行の先生から発言を求められて戸惑ったのである。下線11.12にあるように、授業の目標との関係で考えるよう指示されたが、子どもの表面的な活動については明確なので判断できるが、表面に現れない子どもの思考過程については理解できないと語っているのである。教師の指導力向上のためと言われている授業研究会も新任教師は内容を理解できず新たな不安や困難さを感じるようである。

## ② 子どもの指導に関する不安

新任教師たちは、授業に関する不安だけでなく、子どもの指導に関する不安についても感じていた。P小学校のE先生である。2年生担任の明るく開放的な感じのする女性である。

やっと今になって、こんなんしたら子どもが喜ぶなって、こんなことは2年生で難しいな<sup>13</sup>って分かってきて、最初は全然それが分からなくて<sup>14</sup>、ノートをとる時とかも黒板に書いたら子どもはノートに写せると思ってて、それが全然できてなくて<sup>15</sup>っていうのが、今やっと分かりましたね。

(P小学校 E先生のインタビュー 2007/7)

E先生は、下線13. 14. 15にあるように、児童の発達段階の把握ができていないために、子どものつまずきや分かりにくさが理解できなかつたようである。E先生は教師経験の不足からか、子どもの学年による認識の違いが把握できていなかったのである。採用前のインターンシップでは高学年を担当することが多く、低学年は初めてとのことであった。筆者がフィールドワークを行っているとき、6月に実施する体育大会の並び方についてE先生が説明していたが、子どもたちは学級全体に対する教師の説明をほとんど理解できず、後で個別に同じこと何度も繰り返し聞くという場面があった。E先生の児童理解の不足から子どもに混乱が生じたのである。

また、保護者との対応で子どもとの関わり方に不安を生じ、毅然とした指導ができなくなって、学級が困難な状況に陥ることがあった。P小学校のC先生である。ある男の子が意地悪をするので呼び出して叱ったことに対する保護者のクレームに端を発していた。

(ある男の子が別の男の子に) いじわるするんで、それを私が何度言っても聞かないんで、何回か呼び捨てして怒ったことがあるんです。「やめなさい」って。それを保護者に懇談のときに「女の先生やのに、なんで呼び捨てにするんや」って言われて、他にもいろいろ言われて言葉遣いがどうやこうやって…  
(P小学校 C先生のインタビュー 2007/7)

この後、C先生の子どもへの指導に揺らぎが見え、学級全体が落ち着きのない状態となっていた。ここにはジェンダーの問題もあるが、C先生にとって、年上の母親に厳しい注意を受けたことが、子どもへの指導に負の要因として働いたことになる。

このように、新任教師の不安は多岐にわたっていた。月曜日の憂鬱さや、吐き気や涙が止まらないというような身体的反応まで生じさせる場合もあった。困難を内に抱え、新任教師が新任の時代を乗り切っていくのは至難の業であるといえよう。

そこで、筆者の出会った新任教員だけでなく、他の新任の先生たちも同様に困難を感じているのであろうか、どのような側面に不安や困難を感じているのであろうか、新任教員全員を対象としたアンケートを実施することによって更なる分析をすることにした。実施に当たっては初任者研修を主催している教育センターに依頼し、協働で実施することとした。質問事項の設定と分析は筆者が行い、アンケート実施は教育センター指導主事が行い、結果の活用については協働で考えていこうということとなった。以下、次節にアンケート結果の分析を記述する。

## 5. 量的調査から見えてきた困難性とは

調査対象は、Z市に新規採用された小・中学校の新任教員全員（小学校教員163人、中学校教員64人）である。アンケートは、初任者研修実施時に教育センター指導主事によって、「今後の研修



の改善に活かすこと、各勤務校には伝えることはないこと」ことを新任教員に伝えたくて実施された。時期は1学期が終わった2010年7月（中学校教員）、8月（小学校教員）である。

調査項目は、16項目からなっており、「大変困っている」「困っている」「困っていない」「自信を持っている」の4つの選択肢から1つ選択するものである。選択結果を小学校教員・中学校教員毎に表したのが次の表である。

表2 小学校新任教員の困難の割合

	1	2	3	4
児童の発達段階の理解	3.7	58.0	38.3	0.0
多様な子どもたちの理解と関わり方	14.3	47.8	34.8	2.5
教科、道徳、総合的な学習の指導方法	24.8	60.2	14.3	0.6
教科、道徳、総合的な学習の指導上の専門知識不足	23.8	64.0	11.8	0.6
教科、道徳、総合的な学習の指導計画	26.3	60.6	12.5	0.6
学級の運営や経営について	12.6	46.5	35.8	5.0
学級や学年の生徒指導について	8.9	48.1	36.1	7.0
キャリア教科を視野に入れた進路指導について	16.8	52.9	29.0	1.3
特別活動など教育活動における企画、運営、指導について	13.8	58.5	25.8	1.9
教員同士の協力、関係作りについて	31.0	18.5	55.6	22.8
教員としての言動や態度の在り方について	3.7	39.8	50.3	6.2
管理職との関係について	1.2	11.1	60.6	27.2
保護者との関係について	4.4	36.5	50.9	8.2
地域との関係について	0.6	32.7	57.9	8.8
自分の研修	5.0	44.7	44.7	5.6
自分の日常生活について	0.6	6.8	16.7	58.6

1 = 大変困っている、2 = 困っている、3 = 困っていない、4 = 自信を持っている  
網掛けは50%以上の割合を示しているものである。「大変困っている」に関しては20%以上である。

表3 中学校新任教員の困難の割合

	1	2	3	4
児童の発達段階の理解	6.3	69.8	22.2	1.60
多様な子どもたちの理解と関わり方	9.5	60.3	28.6	1.60
教科、道徳、総合的な学習の指導方法	12.9	71.0	16.1	0.0
教科、道徳、総合的な学習の指導上の専門知識不足	19.0	63.6	17.5	0.0
教科、道徳、総合的な学習の指導計画	17.5	66.7	15.9	0.0
学級の運営や経営について	21.9	48.4	30.6	0.0
学級や学年の生徒指導について	31.7	55.6	12.7	0.0
キャリア教科を視野に入れた進路指導について	25.8	56.5	16.1	1.6
特別活動など教育活動における企画、運営、指導について	9.5	69.8	19.0	1.6
教員としての言動や態度の在り方について	12.9	43.5	40.3	3.2
教員同士の協力、関係作りについて	6.3	17.5	60.3	15.9
管理職との関係について	0.0	19.0	71.4	9.5
保護者との関係について	11.1	39.7	46.0	3.2
地域との関係について	6.3	33.3	55.6	4.8
自分の研修	12.7	44.4	38.1	4.8
自分の日常生活について	17.5	23.8	44.4	14.3

1 = 大変困っている、2 = 困っている、3 = 困っていない、4 = 自信を持っている  
網掛けは50%以上の割合を示しているものである。「大変困っている」に関しては20%以上である。

表2.3を見ると、小学校教員と中学校教員に共通する点と異なった点が見出される。共通点としては、次の3点である。①小学校教員・中学校教員は共に児童生徒の発達段階の理解や学級経営、進路指導や特別活動などに関して困難を感じている。②教科・道徳・総合的な学習に関しての指導方法や専門的な知識・学習計画など学習指導に困難性を感じている。③教員同士、保護者、地域の人などとの人間関係には困難性をそれほど感じていない。また、自分の研修や生活面についてもある程度の自信を持っている。

小学校教員・中学校教員の異なっている点は、「大変困っている」を選択した割合の高い項目の違いである。小学校教員は「教科・道徳・総合的な学習の時間の指導方法」「教科・道徳・総合的な学習の時間についての専門的知識の不足」「教科・道徳・総合的な学習の時間の指導計画」について「大変困っている」を選択した割合が20%を超えるのに対して、中学校教員は10%台にとどまっている。一方、中学校教員は、「学級の運営や経営について」「学級や学年の生徒指導について」「キャリア教育を視野に入れた進路指導について」は「大変困っている」を選択した割合が20%を超えている。また、自分の生活への自信は中学校教員より小学校教員の方が高い。中学校教員は、自分の生活状況に小学校教員ほどには満足していないようである。

以上のように、小学校教員・中学校教員の困難の認識状況に共通点と相違点を見出した。これらは彼らの置かれている状況の違いを物語るのはのではないかと考えられる。小学校教員は学級担任をし、全ての教科を一人で指導しなければならず、毎日指導する全ての教科について学習計画や指導方法を考えなければならないこと、中学校教員は、思春期という生徒の発達段階や生徒指導上の課題、クラブ活動など特別活動的な要素に多くの時間をかけざるを得なく、その指導方法の習得が喫緊の課題となっているのであろう。また、これらの違いにもかかわらず、学習指導や生徒指導が彼らの困難性の認識に大きなウエイトを占めているのは間違いないであろう。

さらに、小学校教員・中学校教員を含めて、彼らの困難の特徴を整理することとした。「大変困っている」「困っている」を『困っている』に、「困っていない」「自信を持っている」を『困っていない』として、値の再割り当てを行った結果である。表4は『困っている』だけを表記したものである。この表を見ると、『困っている』項目と『困っていない』項目に大きな差があることが読み取れる。80%以上困っている項目と10%台しか困っていない項目があるのである。これは何を意味しているのだろうか。

表4 『困っている』と認識している割合 (%)

児童生徒の発達段階の理解	65.8
多様な子どもたちの理解と関わり方(障害のある子どもを含む)	64.0
教科、道徳、総合的な学習の指導方法(板書・発問等)	84.0
教科、道徳、総合的な学習の指導上の専門的知識不足	85.8
教科、道徳、総合的な学習の指導計画(年間・単元・時限等)の立案と評価方法について	85.3
学級の運営や経営について	60.9
学級や学年の生徒指導について	64.4
キャリア教育を視野に入れた進路指導について	70.7
特別活動など教育活動における企画・運営・指導について	73.3
教員としての言動や態度の在り方について	46.7
教員同士の協力、関係づくりについて	22.2
管理職との関係について	14.2
保護者との関係について	43.1
地域との関係について	34.7
自分の研修(時間・内容・方法)について	51.6
自分の日常生活について	28.4

表4を4つのグループに分類できると考えた。困難性の認識が80%以上のグループⅠ（以下、GⅠとする）、困難性の認識が60%以上80%未満のグループ（以下、GⅡとする）、困難性の認識が40%以上60%未満のグループ（以下、GⅢとする）、困難性の認識が40%以下のグループ（以下、GⅣとする）の4つである。分類した内容を図にしたのが次の図2である。

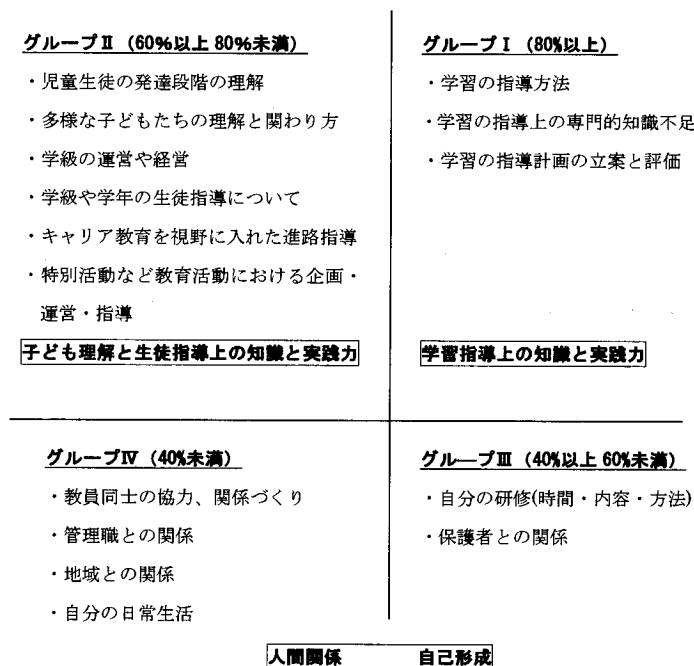


図1 困難の割合のグループ分け

G Iは、80%以上の新任教員が困っている内容を表示している。この3項目を「学習指導上の知識と実践力」と捉えることができると考えた。G IIは、60%以上80%未満の教員が困っている項目を示している。内容から「子ども理解と生徒指導上の知識と実践力」と捉えることができるであろう。また、G IIIとG IVは「人間関係と自己形成」と捉えた。新任教員であるからには、新しい職場でさまざまな新しいことに出会い、ある程度の困難さや不安は予測されることである。しかし、G IやG IIの項目の割合はあまりに高いと言わざるを得ないであろう。内容を見ても、G Iの「学習指導上の知識と実践力」は教師としての仕事の中核にあたるものである。そこに最も多くの不安と困難さを感じているのは考慮を要することである。G IIの「子ども理解と生徒指導上の知識と実践力」にしても、ある程度の自信が無いと実践できにくい内容と言えよう。他方、G III、G IVの「人間関係と自己形成」は、職場における人間関係を円滑なものとし、職場の資源習得を容易にするという面があると言えよう。ここに困難さを感じていないということは、新任教員にとって望ましいことである。

以上のように、本調査から明確になったことは、新任教員は教師としての仕事の根幹にかかわる学習指導や生徒指導に最も多くの不安や困難さを感じており、人間関係には大きな不安を抱えてはいないということである。

## 6. 考察

まず、考察に先立って、フィールドワークによる調査とアンケート用紙による調査の結果から読み取れたことを整理する。フィールドへの参与観察とインタビューから、①授業に関する不安、②子どもの指導に関する不安の2点に新任教員の不安を見出した。授業に関する不安には二つの側面があった。一つ目は自分自身が授業をするときに自分の作成した指導計画と指導方法にズレが生じ、それへの対応ができなかったことから生じる不安であり、二つ目は、校内研修などの時の先輩との関わりの中で研修内容を理解できない、そこで語られる言語の意味がわからないというものである。また、②の子どもの指導に関わるものでは、子どもの発達段階を理解できないために目の前の子どもの状況が理解できず困惑している姿をみいだした。保護者の苦言に対して動揺し生徒指導に揺らぎが生じ、学級がうまく機能しなくなった事例もあった。これら①、②の不安は、実践力の不足から生じる新任教員の感情であり、彼らの困難性の表れと捉えることが出来るであろう。そこで、これらの質的調査から読み取れることは、新任教員がもつ困難性は、学習指導に関するものと生徒指導に関するものであると整理できるであろう。

次に、アンケート調査結果から読み取れたことをみる。以下の2点である。

まず1点目は、小学校教員・中学校教員は共に児童生徒の発達段階の理解や学級経営、進路指導や特別活動などに関しての困難や、教科・道徳・総合的な学習に関しての指導方法や専門的な知識・

学習計画など学習指導上に困難さを感じているということである。中でも、小学校教員は学習指導上に困難さを強く感じ、中学校教員は生徒指導上に困難さを強く感じていた。2点目は、図1にあるように、小学校・中学校教員全体をみると、8割以上の教員が「学習指導上の知識と実践力」に困難性を感じ、6割～8割の教員が「子ども理解と生徒指導上の知識と実践力」に困難さを感じているということである。

以上のように、質的調査においても量的調査においても、新任教員は学習指導に関して最も多くの困難性を認識しているということが明確になった。次に多いのは生徒指導に関する困難性の認識であった。教員同士や保護者、地域の人たちとの人間関係にはあまり困難性を感じていないということが判明した。

新任教員の困難を更に詳しくみると、養成機関の中で習得可能なもの、現場での実践を通すことによらないと取得できにくいものがあると言える。学習指導上の専門的知識は養成段階である程度習得可能であろう。しかし、指導方法や指導計画の立案と評価は、養成段階では指導時間の限界や児童生徒が目前にいない中での履修であり推定の範囲を出ないことなどから、そこには自ずと限界性があるといえよう。これらは、実践を通して育成される力と考えられよう。実践しながら省察をすることによって身に付く。子ども理解と生徒指導上の知識と実践力も同様に考えられるのではないだろうか。養成機関の基礎的な知識を活用したり補充したりしながら、文脈の即して柔軟に対応する中でこれらの力は習得されるものであろう。

このように、新任教員の困難性の分析からいえることは、養成期間終了後すぐに責任のある立場に立ち、児童生徒への指導をするのは極めて厳しい状況であるということである。近年、教員免許取得の高度化・長期化が求められるようになってきている。日本の免許付与は学士を要件としており、欧米における修士取得を免許付与の要件としている国々に比べると、短い期間での養成となっている。4週間という教育実習は実践力育成という側面から考えるとあまりに短いと言えるのではないだろうか。日本ではインターンシップや介護等実習のように4週間以上の実習経験を有しているとも言われているが、実際に個別に指導教員が付き、主体的な実践を通して学ぶという面からみると十分なものとは言えないであろう。

以上のように、本研究は、これまで明らかにならなかった新任教員の困難とは何かについて、彼らの視点から量的・質的調査を基に分析したものであり、教員養成の高度化・長期化を考える上で意味あるものと考えられる。

#### (主な参考文献)

- 秋田喜代美 (1996) 「教育における『省察』概念の展開、反省的实践者を育てる教師教育をめぐる」教育学年報第5巻 世織書房
- 秋田喜代美 キャサリン・ルイス (2008) 『授業の研究 教師の学習』

- 浅田 匡 生田孝至 藤岡完治 編著 (1998)『成長する教師』金子書房
- Schon.D.A 1983 "The Reflective Practitioner" New York (=佐藤学・秋田喜代美 訳 (2001)『専門家の知恵』ゆみ出版)
- 稲垣忠彦 久富善之 編 (1994)『日本の教師文化』東京大学出版
- 神内靖彦 (2008)「教師と教師教育をめぐる今日の問題状況」日本教師教育学会編『日本の教師教育改革』学事出版
- Jean Lave & Etienne Wenger (1983) "Situated Learning Legitimate peripheral participation" (=佐伯 胖 訳(1993)『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書)
- 久富善之 編著 (2008)『教師の専門性とアイデンティティ』勁草書房
- 久富善之 編著 (2003)『教員文化の日本の特性』多賀出版株式会社
- 石原陽子 (2008)「新任教員の成長の置ける省察の重要性」大阪大学教育文化学研究紀要
- 川床靖子 (2007)『学習のエスノグラフィー』春風社
- 松雄 陸 (2006)『経験からの学習』同文館出版株式会社
- パトリシア・クラントン (1995) 入江直子・三輪建二 訳 (2004)『おとなの学びを創る ―専門職の省察的实践をめざして』風書房
- 佐藤学 (1997)『教師というアポリア 反省的实践へ』世織書房
- 佐藤学 (2003)「教師文化の構造」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会
- 佐藤学 (2008)「教師教育の危機と改革の原理的検討」日本教師教育学会編『日本の教師教育改革』学事出版
- 佐藤学 (2009)『教師 花伝書』小学館
- 佐藤公治 (1999)『対話の中の学びと成長』金子書房
- Shimahara, N&Sakai, A. 1995, *Learning to Teach in Two Cultures : Japan and The United States*
- 土屋基規 (2009)「教師教育をめぐる現状と課題」日本教師教育学会編『教員の需要変動と質保証』学事出版
- 上野直樹 (1999)『仕事の中での学習』東京大学出版
- 上野直樹 (2006)『文化と状況的学習』凡人社
- 山崎準二 (2002)『教師のライフコース』創風社
- 油布佐和子 編著 (2009)『教師という仕事』日本図書センター
- 船寄俊雄 (2002)「教師とは―教師の役割と専門性を深める」『講座教師教育学第1巻』学文社

(ABSTRACT)

A study of problems facing newly-employed teachers:  
based on a quantitative and qualitative research

ISHIHARA Youko

This study aims to clarify problems that confront new teachers. The past studies show that they usually develop professionally through advice from more experienced colleagues in on-and-off informal conversations. However, since there have been no studies on what specific problems they actually have, one might argue that the period of teacher training is being prolonged. I conducted interviews and questionnaires with new teachers and found out that they have a lot of problems. One of the most difficult problems facing newly-employed teachers is how to teach in their classrooms and how to conduct their classes during their first year.